

自主調査研究報告 [継続報告]

北海道の歴史的寒地港湾整備技術に関する
調査研究(他2A-3-②)

大分類

他2A

中分類

他2A-3

1. 目的

小樽港をはじめとする北海道の港湾整備は、明治時代から本格的に進められた。例えば、ケーソン式防波堤は大正元年(1912年)小樽港南防波堤に採用され、その後、全道の港湾に普及したが、これらの港湾技術資料は個々の港湾毎に取りまとめていることが多く、どのような経緯を経て、全道に普及したのか歴史の変遷を体系的に取りまとめた資料は些少であり、その内容も断片的となっている。

このため、新技術を検討するにあたり、過去の実施例を参考する際も体系化された資料がなく、個々の港湾に関する文献等から調べる必要がある。また、北海道開発における「港湾整備の役割」、「歴史的位置づけ」についても、整理されたものがなく後世に伝えるものが存在しない状況にある。

こうした背景から、北海道開発すなわち社会資本整備に大きく寄与したと考える港湾整備を再評価するとともに、今後の港湾整備の発展に資することを目的として、取りまとめるものである。

今後大幅な事業増加が見込まれる「維持管理」においては、施設の歴史的価値を評価し、次世代にどのような形で改修していくかという視点も重要となっている。

2. 実施内容

調査対象港の資料収集にあたり、関口萩原建設工業(株)特別顧問の指導のもと、はじめに「北海道の開拓の進展と社会基盤の整備」、「各港の

整備経過」を公的に認められた北海道第一期拓殖計画事業報文(北海道庁)、北海道第二期拓殖計画実施概要(北海道庁)、築港要覧(北海道庁)および日本築港史(廣井勇)等により、H30年度は主に函館港、小樽港、釧路港および室蘭港における港湾整備資料の整理を行った。

3. 主要な結果

①北海道の開拓の進展と社会基盤の整備

新撰北海道史、北海道交通史等の資料から、北海道開拓方針の施策に対する港湾(漁港)、鉄道、航路、河川および道路の整備による交通体系の進展に対する定住人口、貨物量の推移および産業の進展を整理した。

②各港の整備経過

北海道拓殖計画、日本築港史、築港要覧等の資料より、各港湾の整備、取扱品目および取扱量の変遷(沿革、取扱貨物量、入出港隻数、工事費、計画平面図、施設断面、地勢、計画と実施など)を抽出・整理した。

4. 今後の対応

令和元年度は、北海道開発における明治以降の港湾整備の役割、歴史的位置づけについて、H30年度に調査した函館港、小樽港、釧路港および室蘭港の補足調査、加えて残りの予定調査港湾を全道に点在する「信頼できるデータ」、「文献」に基づき、資料収集するとともに当時の状況が分かる写真および図面の収集も並行して行う。

さらに、調査港において特筆する設計、施行等の新技術の変遷も併せて行うものとする。